平成 28 年 9 月 15 日　第 2486 号

営農NEWS

長雨、日照不足による農作物への影響を出来るだけ軽減する対策に努めましょう

今年は、8 月後半から複数の台風襲来やその影響による天候不順、秋雨前線の停滞などで降雨日が多く、日照時間が少ないか無い日が続いています。9 月 8 日発表の気象 1 ヵ月予報によりますと、「天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、多い確率 50%です。日照時間は、少ない確率 50%です」となって、今後ともこの影響は継続する予想となっています。

このため、現在、収穫期に入っている水稲や生育中期のダイズ、生育中期に入った施設抑制キュウリやトマト、定植期や生育初期の露地秋冬野菜などへの影響を出来るだけ軽減させる対策を積極的に実施するよう努めてください。

1　水稲

コシヒカリが収穫期に入っていますが、降雨や水田土壌の軟弱化で作業に入れない状況がみられます。収穫適期（帯緑籾 10%程度）になった水田では、天候が回復し、作業が可能になれば、乾燥機の能力に合わせて、速やかに収穫してください。なお、乾燥時には、高水分籾の場合、無加温の通風乾燥から開始し、徐々に加温して穀温 40℃以下で乾燥させます。急激な乾燥は、胴割米の原因となりますので避けてください。

また、強風雨で倒伏した部分は、出来るだけ別収穫として品質低下を避けてください。

2　ダイズ

土壌の過湿が続くと生育が不良になるため、圃場の排水対策が必要です。排水溝などの清掃や地表水を排水するために、圃場周囲や圃場内に一定間隔で明渠を作り、圃場排水を促します。

また、茎葉が軟弱になり、病害が発生しやすくなるため、必要に応じて殺菌剤による防除に努めてください。

3　施設抑制キュウリやトマトなど

施設内が過湿で日照不足のため、茎葉が軟弱徒長になりやすくなっています。灌水は必要に応じて控えめに行い、夕方の灌水は避けます。また、適切な肥培管理に努め、草勢が弱っている場合は、葉面散布などで回復を図ります。乱形果や病害果などは早めに摘除し、着果負担の軽減と病害の防止に努めます。

なお、摘果や整枝などの管理作業は、出来るだけ晴天の日に行い、湿度が高い曇雨天の日に行うと、傷口から病原菌が侵入して発病する恐れがありますので、注意が必要です。

キュウリうどんこ病、べと病、褐斑病の防除については、「営農ＮＥＷＳ　第２４８３号（平成 28 年 9 月 7 日発行）」を参照してください。

トマト葉かび病、灰色かび病、疫病の防除については、「営農ＮＥＷＳ　第２４８２号（平成 28 年 9 月 6 日発行）」を参照してください。

4　秋冬野菜（露地栽培）

1）土壌水分が長期に加湿状態となれば、生育不良、草勢低下しやすくなります。また、土壌病害や茎葉病害も発生しやすくなりますので、過剰な水分の除去と地下水位を下げるために、圃場周囲や圃場内に一定間隔で明渠を作り、圃場排水を促します。

レタス、ハクサイの育苗中におけるべと病など病害防除については、「営農ＮＥＷＳ　第２４７９号（平成 28 年 8 月 24 日発行）」を参照してください。

2）大雨で滞水した畑においては、早急に排水するよう促し、作物に付着した泥はできるだけ落として、損傷した茎葉を可能な限り取り除きましょう。さらに、土壌の乾き具合や作物の草勢を観察しながら、必要に応じて追肥や液肥の葉面散布などを行いましょう。特に、露地野菜が風にあおられたり、大雨にたたかれると、病害発生の原因になりますので、必要に応じて殺菌剤の散布を行い、病害防除に努めてください。

また、「営農ＮＥＷＳ　第２４８０号（平成 28 年 8 月 29 日）発行台風 10 号の襲来に備えて」を参照にしてください。

5　果樹

ナシでは黒星病、ブドウではべと病や褐斑病など、収穫後でも茎葉病害の発生が多くなると予想されますので、県参考防除例を参考にして、落葉前まで薬剤防除を徹底してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ＪＡ全農いばらきホームページでもご覧になれます。

JA全農いばらき
生産資材部　営農企画課
電話：029-291-1012　FAX：029-291-1040